研究発表

「夜の寝覚」構造分析の小論

On the Structural Analysis of *Yoru no Nezame*

ケネス・リチャード*

Abstract

Structural linguistics, especially the particular ideas of the French structuralist T. Todorov, says that there are very few new texts. Even if changes occur in the concepts concerning the literary nature or the content of poetics, all new texts are variants of the text which has the one deep structure of that culture's literature and literary arts. Consequently, it is possible to structurally analyze *Genji Monogatari* 〔The Tale of Genji〕 in opposition with earlier texts and one can say the same thing in regard to tales from the late Heian period in opposition to earlier texts. But, as Saussure points out, each text is simultaneously situated in a specific language system (*langage*) and creates the specific language behavior (*parole*). Scholars after Saussure say that one text displays the quality of being linked with other texts or with the deep structure text within that culture — the so-called diachronic dimension (historical). At the same time, it also displays the quality of determining the particular literary

* Richard, Kenneth Leo 〔現職〕 トロント大学準教授

nature — the so-called synchronic dimension (descriptive).

When one researches the Heian period tales diachronically, the following two historical problems may occur.Namely, (1) how to expand narratives whose only precedents are in the episode form and (2) how to refine and expand the technique of creating the main characters found in the earlier works. I hope to make these problems clear through a comparison of *Genji Monogatari* and *Yowa no Nezame* 〔Midnight Awakening〕.

In closing, I would like to analyze and evaluate *Yowa no Nezame* synchronically and make clear by what techniques the literary nature of a specific text (work) is expressed.

まず初めに、私の平安朝物語に対する研究方法一般についてお話しする必要がある。

紫式部は源氏物語を書く実際の過程で、次の三つの大きな問題に直面したと推定される。

(1) 先例としてはエピソード形でしか存在しない語りをどのように拡大するか

(2) 以前の作品がもっていた中心人物を造り出す手法をどのように洗練し拡大するか

(3) 紫式部が蛍の巻で述べているような自分のテクスト（作品）の文学性を一体どんな技法を用いて構成するか

の三つである。

この第3番目の式部の創作意識は自覚なしに作用するかもしれないので、「詩学」からの方法を適用すれば、源氏物語の独特の方法が一層はっきりす

ると思われる。私がここで用いる「詩学」とは、T・トドロフ氏のいう詩学であり、即ち、「(主題分析、構成、文体等々の次元における) 文学上のあらゆる可能性の中より、ある<作者>のなした選択」という意味で用いる。(『言語理論小事典』133 頁、参照)

私の考えでは、それまでのエピソード形の語りを拡大する時に、紫式部があらゆる通時態的技法を使ってエピソードを連ねたと思う。とりわけ事件が生起してくる順にエピソードを書き上げて、従来の口伝語りがもっていた時間性を反映させたのではないだろうか。

こうした技法は第二の問題と関りあう。源氏物語の三分の二は光源氏を中心人物にしている。しかしその光源氏の性格、それを規定する諸要素、及び心理の変化は、女達との出あいを描く一連の事件を通して、読者に理解させる技法が用いられている。この技法もやはり時間的な連続から成っており、通時態的傾向を示す。

作者は螢の巻で書いているように、事件・動作の善悪を問わず両方を確実に取りあげて、述べずには止まない強烈な態度で物語をつくっている。テクストの文学性はこうした作者の観念に宿っている。作品の構造分析はこの点で非常に重要となる。

源氏物語は拡大した語り、中心人物、文学性の点で、日本の物語伝統に偉大な貢献をした。これ以前の作品はこうした発展を可能とする基盤を既に築いていた。例をいうと、個別に存在していた材料や様々な行為者を集積して一人の中心人物の事跡としてそれらを描こうとして終って伊勢物語がある。殆どの事件が在五中将のものとして帰せられた。主題の発展はまた通時態的で、青年から老齢へ、冥土へ行く道にまで及ぶ。在五中将のもつ情的な感受性は、刺激的な反応をよびおこす具体的な事件よりも、更に読者に訴えかける。例をもう一つ。紀貫之が、実際に起きた事件を取りあげるにしても、自分でなく、お供であった女に自分を仮装させて書くことを試みた土佐日記がある。この作品は旅の怖さを情的に高めて描いている。当時の和歌の主な情

的可能性を見事に捉まえて、船に乗っていた女、子供が詠んだ仮想の歌としてそれを表現させた。これらと対照的に餞(はなむけ)に出かけた人々、船方の下手な戯(ざ)れ歌も含まれている。このテクストの文学性は仮装の技法のため、非常に拡大されたと思う。

それにも拘らず、平安末期物語の四篇（夜の寝覚・浜松中納言物語・狭衣物語・とりかえばや）を読む過程で、前の源氏物語に対する三つの問題の解決する方法が明らかになっている。比較の上では、源氏物語は拡大された語りとしてより、むしろ見事な連続したエピソードとして存在するのではないだろうか。一人の中心人物を描いた作品としてより、むしろ様々な対照的、あるいは相似的な人物の記録として存在するのではないだろうか。

ここでは比較するのに現在私が研究している物語の中から夜の寝覚を取り上げるのが最も相応しいと思う。なぜなら源氏物語が切りひらいた文学性の重要な新方向を夜の寝覚が現実化しているからである。

私が援用する研究方法は、現在フランスで盛んに発達している構造主義、特にその言語学と文学批判を組み合わせた構造分析である。構造言語学、特にフランスの構造分析論者のT・トドロフ氏の固有概念は、「全く新しいテクストはない」という事である。即ち、文学性、或いは「詩学」の内容に関する概念には変化が起りえても、新しいテクストは皆、或る文化の文学文芸における同一の深層構造を有する一つのテクストの異文なのである。ただ、ソシュールに言わせると、それぞれのテクストは一般の言語（LANGAGE）に位置すると同時に特定の言（PAROLE）を構成する。ソシュール以後の論者に言わせると、一つのテクストは他のテクスト或いはその文化内の深層構成を基盤としたテクストと関りあう傾向――いわゆる通時態的方面（歴史的）――を示す。それと同時にまた特定の文学性を決定する傾向――いわゆる共時態的方面（範列的）――も示す。トドロフ氏の分析はその共時態的方面、特に構造意味論に集中している。彼の共時態的見方は言語学の範列を借りている。つまり、一つのテクストの文学性の研究にはそのテクストの品詞とそ

れらの結合を探らなくてはならないということなのである。

以下、先の第1第2の平安朝物語における問題の解明を、あらゆる通時態的構造分析を使ってためしてみようと思う。第3の文学性についての問題は、共時態的分析を用いようと思う。次のような手順で行う。(1)、語りを拡大する問題(源氏物語と夜の寝覚を通時態的に比較して)、(2)、中心人物の問題(同様にして)、(3)、文学性の問題(夜の寝覚の品定めの部分を共時態的に分析して)。そして最後に通時態的分析を共時態的分析を結合して、夜の寝覚の品定めの部分と源氏物語の有名な雨夜の品定めとを比較したいと思う。

Ⅰ、語りを拡大する問題

≪源氏物語≫

物語伝統の中で源氏物語は以前のエピソード形語りから長編へと非常に大きな進歩を示しているので、伊勢物語や土左日記の漠然と編成された季節や時間の進行よりはもっと意識的に、語りの展開を不可避的に密にする技法を作者が工夫したに違いない。源氏物語では、前後するエピソードをつなぐ技法として、読者に期待の種をまいて後にそれの成就を描くという過程がとられていると言えるだろう。若紫の巻からその期待の種を読者にまく例を一つ、とりあげよう。その期待は、明石の巻でみのる。北山の場面は、光源氏が夕顔の急死を原因とする「ワラハヤミ」を加持祈禱させるために北山へ行くという意味で、前の夕顔の巻とも一定の因果関係をもつにしても、偶然に若紫と出あう主題に基づく一つの纏まったエピソードにもなっている。この語りの中に、光源氏の気を紛らわすために加えられたたおしゃべりがその種に当る。

> 近き所には、播磨の明石の浦こそ、なほ、殊に侍れ。何の、いたり深き隈はなけれど、ただ、海の面を見わたしたるほどなむ、あやしく、異所に似ず、ゆほびかなる所に侍る。かの国の前の守、新発意の女かしづきたる家、いと、いたしかし。(1)

光源氏が初めて北山のような人間離れした所を訪れた興奮で場面は終るが、明石の地は北山から連想される光源氏に適する理想的自然だと読者は即時反応しながら、同時に光源氏が自由意志でする流浪に適する場所にもなりそうな暗黙が得られる描写である。

明石の巻で以前にはめ込んだおしゃべりの種が成就する。光源氏に対しては須磨の嵐と外の事件発生の偶然さが一時的なプロット誘導の因となっても、紫式部がこの巻で直接に読者に北山での話を思い出させる。

> 所のさまをば更にもいはず、造りなしたる心ばへ、木立・立石・前栽などの有様えも言はぬ入江の水など、「繪に書かば、心のいたり少なからむ澤師は、え書き及ぶまじ」と見ゆ。月頃の御住まひよりは、こよなく明らかに、なつかし。御しつらひなど、えならずして、すまひけるさまなど、げに、都の、やむごとなき所々に異ならず。艶にまばゆきさまは、まさりざまにぞ見ゆる。(2)

≪夜の寝覚≫

夜の寝覚の作者は期待とその成就を使ってエピソードを結合するという技法を捨てる。実際、夜の寝覚は少しもエピソード風な作品ではない。その語りの展開は事件としてよりもむしろ中心人物の観念と関わっている。事件の連続が観念に対して第二次的存在となるからである。源氏物語での語りの連続は事件を軸にして行われるのに対して、夜の寝覚は空間を軸にして行う。つまり、季節変化は、事件の進展よりも、中心人物の情緒の変化とより強く関っている。例として、わずかな時間変化を背景とした情緒の変化を一つあげよう。この例は第三第四巻の区切りと偶然一致している。

世間には知られていないが、寝覚の上は中納言の子供二人を儲けて、現在は自分のママ娘の後見役として参内されている。中納言がそれをきっかけに自分の良心に背きつつ、春の短か夜の忘れられぬ契りを結ぶ。中納言の熱情は天皇が寝覚の上に抱く同様の御寵愛に刺激されているし、寝覚の上も明く

る日に帝に暇乞いしようと決心した。

いひいひては、めぐりあふ年ごろのかぞへられて、めづらしくあはれに、夢の心地するにも、しのびがたう泪のこぼれつつ、秋の夜だに、人がらなる物なれば、まいて、春の夜のみじかさは、まどろむほどなく明けぬるなめり[3]。

第四巻は当時男が暁に別れるべきであった翌朝に場面を運ぶ。長男のまさこ等が起きて天皇にお仕えする準備を始めても中納言は、寝覚の上のところから立ち去ろうとはしない。寝覚の上も天皇が万一こんな情景を御覧になっても構いはしないと思い始める。第四巻の書き出しは2頁位の長い段落であるので、ここでは引用を主な部分だけにする。

（中納言―内心）あながちにしのばんの御心もなく、今さへ泪をせきかね、「あながちに別れやいでん」など思せば[4]、……

（寝覚の上）督の君などの、「さまざまにも」とおもひ給ふらむ程の、これも、なのめならぬはづかしさに、「なおさりげなくもてなして、しのびつつ立より給はむこそよからめ。里などにいでなんにこそ」と、わりなく思いたれど[5]、……

（寝覚の上―内心）昔より今に、めやすからず、露ばかり心にくき思ひやりなくのみある、身の有さまかな。ものの心を思ひしりしより、「何事も、などてか人におとらん、いかでいみじうおもりかに、はづかしく、人にすぐれても、ただなる世にすごいてばや」とのみ思ひをごりし物を[6]、……

中納言は、こばみもしない寝覚の上を奥の間につれ出して、ゆっくりと前夜の逢瀬の名残を楽しむ。

第三巻は愉快奔放な会話で閉じられて、第四巻は全作品の主題の最終解決（寝覚の上の自信再発見）を述べ始める。第三第四の接続は朝晩の自然の移り変りによってなされる。主題は全作品の共時態的範列の中にある。つまり

世の中に寝覚の上を圧迫する逆境があっても益々それに立向かう自信を養う事。主題に関してはのち程共時態的分析をする所で更に述べようと思う。ここではただの夜の寝覚はエピソード形の作品ではない事を指摘しておく。この作品は全く、エピソードの連続の上でも文学性の上でも、源氏物語と対照的な存在であるようだ。

II、中心人物の問題

≪源氏物語≫

私の考えでは、紫式部の書き方は事件、時間を軸にして用いているので、従って中心人物の描き方も同じである。つまり、性格の描写が、光源氏自身の自己反省よりも、事件、或いは他人により光源氏の性格に対する評価を通してなされている。ここでは朝顔の巻からクライマックス的な例を取り上げたいと思う。朝顔の君は自分の従兄弟にあたる光源氏の独特な「誠さ」に疑いをはさんで、光源氏にとっては求愛を断われる初めての辛さを味わわせる。続いて紫の上が夫の貞節心にちくりと針をさす。紫の上付きの女房の口を通してここでの最終的評価がなされる。

（著者が朝顔について）宮は、そのかみだに、こよなく思し離れたりしを、今は、まして、たれもおもひなかるべき御齢・おぼえにて「はかなき、木草につけたる、御返りなどの、折過ぐさぬも、かるがるしくや取りなさるらん」など、人の物言ひを憚り給ひつつ、うち解け給ふべき御気色もなければ、ふりがたく、おなじさまなる御心ばへを、世の人にかへり、珍しくも、ねたくも、おもひ聞え給ふ[7]。（光源氏が紫の上に）「あやしく、御気色の藏る頃かな。罪もなしや。『鹽焼き衣の、あまり目馴れ、みだてなく思さるるにや』とて、とだえ置くを、また、いかが」など、きこえ給へば、「馴れ行くこそ、げに、憂きこと多かりけれ」……（紫の上―内心）「かかりけることもありける世を、うらなくて過ぐしけるよ」と思ひ続けて[8]、……（紫の上付きの女房）「いでや、御好色心の古りがた

きぞ、あたら、御瑕(きず)なめる[9]」

こうして本人の性格は、光源氏自身は自覚なくても、私達読者の側で、本人が年齢の割には円満ではないようだと読みとる以外にはないと思う。

≪夜の寝覚≫

寝覚の上は事件を超えて主体的独立性を以て描かれていると思う。自分自身による評価によって性格が示される。その自己判断の具象化は、作者の書く過程で人物の内心描写を通してなされ、読者は、中心人物の性格をその人物自身から直接知らされる位置にある。最後の第五巻から例をあげよう。寝覚の上は出家して尼寺に逃げ込むよりは、今までの中納言への愛着をふりすてて、どうにかしてこの俗世で可能なかぎり暮らしていこうと決心をするにいたる。

こなたには、くるる夜、あくる日ごとに、昔はた恋しからぬやうなく、「されば よ。思はざりしことかは。いまは、やうやう世を思ひはなれて、行ひよりほかのことなく、いかにもこの世の事は思ひたへて、やすからまし物を、つきせずあいなくもあるかな」と、心のうちに思せど、「ひまなく、あまり横目なかりし昔の御ありさまを、『むつかしくもあるかな。ときどきはゆきあかるる方ありて、みえ給はずは、心やすく遊びをもし、うちとけてあるべきに、心ゆるぶ時なく、つとものし給よ』とおぼえしことの、かなふにこそあめれ」と思ししられ、「かくてもいつまであべき身ぞ。もしたいらかにもあらば、遂におもふ本意とげてこそあらめ。幼き人々、御ゆかりばかりにそむきがたく、さすらへ出でたるにこそあめれ、いとことはりなる御もてなしを思ひしり顔ならん、わが思さまにはたがひて、うたてあべし」と思せば、かりそめの、よその物に思ひはなち、うちとけてうらみ顔なる気色、ゆめにも洩らさず、「こはあるまじき世に、しばしめぐらふぞかし」と思し絶えて……[10]

Ⅲ、文学性の問題

一つの作品に限っての共時態的分析では、語りの具体的種々相からその中に共通普遍的な一般命題（PROPOSITIONS）をひき出し単純化する。つまり、テクストの語りから一般モデルを抽出し、一つの語りの特殊な発言（PAROLE）から、その下部構造である一般言語（LANGAGE）を認めるわけである。[11]

トドロフ氏は様々な語りを規定する、この分野での≪文法≫を次のように論じている。

(1) 語りは少くともいくらかの連関する命題からなる一つの連続要素（SEQUENCE）によって構成される。

(2) 連続要素は文(SENTENCE)或いはパラグラフである様に考えてもよろしいし、命題は名詞と、形容詞或いは動詞から成るように考えてもよい。

(3) 名詞というのは命題の主語或いは人物を、形容詞というのは人物の特徴を、動詞とは人物の動作を指す。(ここでは普通文法の概念と同等に考えないように注意。)

(4) 概して、人物とその特徴を描く命題は安定或いは不安定の状態を述べる役割を果して、人物とその動作を描く命題はこの二つの状態の移行を意味している。[12]

トドロフ氏の概念を頭に入れておきながら、夜の寝覚にある品定めの連続要素を取りあげて、そこに文法モデルの概念を適応させてみたいと思う。そしてこのテクストの詩学に関して少し言及し更に夜の寝覚の品定めの連続要素と、源氏物語の中の似た例とを比較する。

品定めは第一巻で行われる。登場入物の紹介や主題としての最初の不安定などを描いた所に出てくる。男の中心人物の中納言は太政大臣の大君との婚約はすでにととのっている。中納言は関白左大臣の長男に当る。中納言と仲

が良い宮の中将が石山寺で大した身分でもない女と契りを交した話を中納言が耳にして、好奇心からその石山の女と思しい人のもとに夜這いに行く。実際には自分が憧れて思うこの人は直きめとる予定の大君のはらからの中君（寝覚）であった。品定めの所では中納言はそれはいまだ分らない。情を通じて後寂しく思いに沈みながら、中納言は恋しく思う女のことを中将に話させる。その後につづく品定めは全部人違いの仮想説ばかり。

品定めに運ばれる前の語りの命題は次の様に整理しうる。

(1)　DとEは姉妹。（人物＋特徴）

(2)　DとEの生れは良い。（同上）

(3)　DはEより年上。（同上）

(4)　DはEより結婚が必要。（人物＋動作）

(5)　Eは余りに生れつき才能がある。（同上）

こうした語りの進行は安定を描写する特徴の命題から不安定に運ぶ動作の命題に次第に変化していく。

続く不安定の命題も同様に述べる。

(6)　BはDと婚約させられる。（人物＋動作）

(7)　BはEと一夜契る。（同上）

これで不安定の命題が動き出す。品定めはこの不安定の状態を背景にして行われる。（阪倉篤義校注『夜の寝覚』63—67頁・参照）中納言は素姓のわからぬ女とのあやまちを、自分に説明しようとして、不安定から安定の状態に変化させようとする。命題は次のようである。

(1)　AはBに話をしいられる。（人物＋動作）

(2)　AはCに逢った。（人物＋特徴）

(3)　AはCと契っていない。（人物＋動作）

(4)　BはAの話を疑はしく思う。（人物＋特徴）

(5)　AはBに自分の心配を打明ける。（同上）

(6)　BはAの高潔さを疑問にする。（同上）

(7)　BはAの発言を受け入れない。(人物＋特徴)

(8)　Bは自分の本当の身元を隠すことが正しいと判断する。(人物＋動作)

この連続要素の進行は、初めに動作の命題から特徴の命題への移り変りを描写していて、不安定＋動作から再び一層激しい不安定の情態で終る。第二の不安定が、新たな段階であることを示すため作者は読者に次のような理解を求める。中将が語った石山の女は中納言の夢中になった人とは違うという疑いを中納言が抱いたということを。

この品定めは僅かな連続要素であって直接法（実際に行われた動作・言動）が使用されている。読者が、二人の人物は嘘つきだとおのずから認定するように仕組まれている。中将は石山の女が自分に靡いてくれないことを妬ましく思う。中納言は自分が憧れを抱いた女は別人であるとの疑いをもっても、自分の危惧をごまかす方法で中将の嫉妬をかきたてる。

品定めはこういうふうに終る。

かやうに、すずろごとを、とかく言ひまぎらはし明かい給ふ。かたつかたの胸は、あくべき世なく、くるしくぞ思さるるや。[13]

品定めのすぐ後にくる語りで、寝覚付の女房は、忍んではなく家の婿の中納言だとわかる。寝覚はその子を宿していることを知る。それによって新たな安定がやってくる。しかしこの安定は、世間に秘密が漏れないように早目に壊される。

命題が連続要素に結合する方法トドロフ氏によると三つの仕方があるとされる。

(1)　時間的秩序――事件の連続

(2)　論理的秩序――因果関係

(3)　空間的秩序――類似関係[14]

夜の寝覚の一般連続モデルは次の様に設定できるかもしれない。

(1)　世間の掟によって壊されることになる幸福な安定した状態（時間的秩序）――第一巻の二人の姉妹とその不幸な誤解の物語

(2) 二人の中心人物が人目を憚る不安定の状態（論理的秩序）——第二・第三巻の寝覚の上と中納言が世間の抑圧をはねのけようと力を尽くす物語

(3) 不安定の状態を変容することによって得られる相対的幸福（空間的秩序）——第四・第五巻の、一方で中納言は世間的な責任を果し、他方で寝覚は世間における自己の位置を無視して主体的な独立を求める物語

夜の寝覚の独特な文学性は、その命題を主に空間的秩序で連続要素を構成する技法にある。

≪源氏物語≫——雨夜の品定め

書き出しで三つの品の女を紋切り型に規定して、望み通りの女を探し出すことの難かしさを述べてエピソードが進行する。結論を下さず、語り手の身分が低くなればなるほどはめをはずして益々あやしい物語がとびだして夜が明ける。ここでは概して様々な命題の連続は時間的秩序で組み立てられる。また品定めの数々の語りは、安定（人物＋特徴）した状態で光源氏を楽しませる目的を果そうとしている。命題の叙法は直接法（前を参照）から希望法に次第に移る。希望法(OPTATIVE)とは、人物の希望通り、将来実際に行われる可能性をもった命題だとされる。

しかし、既に安定した状態から遠のいて受身的な聞手である光源氏は、藤壺の宮とあやまちを起す状態にある。そうした光源氏の不安定な心は、品定めのたわいもない物語に大して静められるはずもない。従って空蟬や夕顔への惚れ込みようは、母更衣の死後、その代りの人を追求することによって起される不安定を除く役割を全く果さない。雨夜の品定めでこうして光源氏が不安定であるという事は光源氏の世間話に対する無関心と、それらのくだけた話を受け入れようとしない態度で現わされている。

結論として、源氏物語では命題の連続要素を構成する時に時間的秩序の技法を主に使用されるのに対して、夜の寝覚の品定めのエピソードの場合には、むしろ論理的空間的秩序の技法を主に使用していると考える。つまり源氏物

語の場合は安定・不安定の状態の移り変りは事件の命題（人物＋動作）で進行するのに対して、夜の寝覚の場合は類似の関係にある人物の特徴の命題で進んでいると思う。

今回の考察は以上でひとまず終えるが、前に述べた共時態的方面とこの夜の寝覚の空間的秩序とは文学性の上では非常に密接な関係がある。今後の研究はこの作品の詩学とその文学性の解明に力を集中していきたい。そして平安朝物語の一般モデルを設定し、物語の独特な「言語」(IANGAGE) はどんな技法から生まれてくるのかという問題も明らかにしていかなければならない。

≪注≫

(1) 山岸徳平校注『源氏物語』（岩波文庫）第一巻・165 頁。
(2) 同、第二巻・70 頁。
(3) 阪倉篤義校注『夜の寝覚』（日本古典文学大系）247 頁。
(4) 同、251 頁。
(5) 同、251・52 頁。
(6) 同、252 頁。
(7) 山岸・前掲書第二巻・261・62 頁。
(8) 同、263・64 頁。
(9) 同。
(10) 阪倉・前掲書 378・79 頁。
(11) TERENCE HAWKES, *STRUCTURALISM AND SEMIOTICS*, p. 95.
(12) TZVETAN TODOROV, *THE POETICS OF PROSE*, pg. 108-119.
(13) 阪倉・前掲書 67 頁。
(14) HAWKFS, p. 98.

討議要旨

三谷邦明氏から、論中、「源氏物語」では第一部のみ、また「寝覚物語」では後半部のみが引用として取りあげられているため、各作品の特質というものがうまく収約されていないのではないか、その上での「源氏」と「寝覚」

の対比であるのでその対比に歪が出ていると思う。また「寝覚物語」よりも宇治十帖の方が構造分析にも空間の問題というものにも耐えられるような作品構造を持っていると考えられるが、との質問があり、発表者より、たしかに「寝覚物語」の後半部と、宇治十帖との方が構造論として比較できる部分が多くありこの論では若干宇治十帖を軽く取り扱いすぎたきらいがあった、との返答があった。